

## ギャラリートーク「人体に学ぶ」

お話：榎本栄子／聞き手：大倉 宏（砂丘館館長）

8月16日（日）14:00～

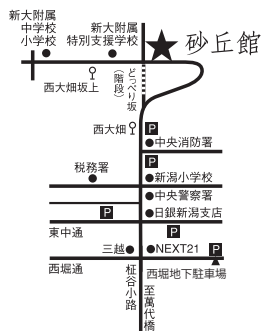
参加費：500円（予約不要、直接会場へ）

榎本栄子（えのもと えいこ）

1942年東京生まれ。66年東京芸術大学彫刻科、同大学院終了。66-67年同大学同科副手。67-72年青山学院女子短大児童科助手兼臨時講師。74-88年北新宿に教室を開設。88年より山梨県の八ヶ岳山麓で制作。

1965-67年二科展50周年記念賞、二科特選、文化庁巡回展。71年現代国際彫刻展（箱根）コンクール賞。78-88年日本・アジア・アフリカ・ラテンアメリカ美術家会議主催展参加。92-99年山梨在住作家展参加。95年戦争展（東京）、戦争と芸術展（大阪）参加。97年個展（ギャラリートラックス／山梨）。99年西会津町公園作品制作。2001-02、13年個展（フィリア美術館／山梨）。04-06年個展（ギャラリーブロッケン／東京・小金井）。

右作品：「寒撥—竹山に思う」2007年～ 松 H30×W24×D55cm



### 砂丘館

田日本銀行新潟支店長役宅

# 榎本栄子彫刻展

## —空間対位法—

### 70年・伝えたいこと

2015年7月17日（金）～9月6日（日）9時～21時

休館日 月曜日（7月20日は開館）、7月21日

会場 砂丘館ギャラリー（蔵）ほか

※一階和室会場は市民利用等でご覧いただけません。場合があります。

観覧無料

〒951-8104 新潟市中央区西大畑町5218-1  
tel./fax.025-222-2676

sakyukan@bz03.plala.or.jp

指定管理者  
新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体

会場には駐車場がありません。また、周辺の道路は  
駐車禁止です。公共交通機関をご利用下さい。

新潟駅からのバス：西循環（12・12A・12B系統）、19系統  
観光循環バス「西大畑坂上」バス停下車徒歩1分

※新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は、  
駐車券提示にて1時間分の無料券を差し上げます。

### 砂丘館

田日本銀行新潟支店長役宅



榎本栄子の存在を教えてくれたのは、山梨県北杜市のフィリア美術館の中山しほさんである。2年前のフィリアでの個展をぜひ見てほしいと言われ、行った。

はじめて見て、そこで、この人を新潟で紹介したいと思った。

この6月に、「砂丘館の展示によせて」という文章が資料とともに榎本から送られてきた。その文を読みながら、なぜ、榎本を自分が紹介したいと思ったのかが分かった気がした。

幼い頃の空襲の記憶にはじまる文は、疎開のこと、夏休みの新潟の記憶、戦後と現在の日本の状況にふれ、憲法やアメリカの従軍慰安婦像をめぐる問題にまで及んでいく。彫刻家の文と思って読みだし、違和感を感じる人もあるだろう。書かれた考えに共感する人、そうでない人もあるかもしれない。それでも、ここに全文を掲出するのは、その思考と、語り口から、榎本という彫刻家の「生き方」を読みとってほしいと考えるからだ。

フィリア美術館に展示された彫刻は、世界や時代へ向けての榎本の主張を託され、抱えながら、それが分かりやすいメッセージになってしまうことを拒否するような思考のひだ、時間の厚みへと自らを折り込み、凝縮して

いく気配があった。造形思考が、現実世界に向けた思考の連続体となり、「人と違うものをつくる」——差異としてのオリジナリティをを目指す回路とは違う道程をたどり、ある独自性にたどりついている。ある時期を境に美術団体等から離れ、一個人として、制作を続けてきたことも、この人にとっては必然だったのだ。

この彫刻家は、彫刻がメッセージの媒体に利用されることを憤る。同時に、彫刻はなにかを伝えるとも信じる。

彫刻は何を伝えるのか——言葉では言えない、実際の彫刻を、エジプトの、ギリシャのそれを見てほしいと言う。画像ではない、彫刻そのものを。あるいは彫刻の空間を。

今私たちをとりかこみ、閉じ込めつつある画像世界は「言葉」とセットになっている。彫刻もまた簡単に画像に、そこに付される言葉に回収される。しかし現実の彫刻には、平面にも、言葉にも決して回収されないものがある。その何かを、この時代を生き、生きてきた一個人の実人生の価値の中心に置くという生き方。

その生き方が、空間となり、空気となって、フィリア美術館の静かな会場で私を動かした。

# 砂丘館の展示によせて

榎本 栄子

この度、館長大倉さんからお話を起こしていただいて彫刻展をさせていただくことになりました。ありがとうございます。

新潟は私にとって無縁のところではありません。近年、豪雪で有名になっている津南町は母の生家があったところで、戦争の頃は疎開をしていた場所でもあります。私は昭和17年生まれですが、その年はまさに太平洋の島々で戦争をやっていた年です。20年の終戦の年まで0-3才ですから人生の一段目は戦争のただ中にいたことになります。記憶にはないはずのはるか遠い日々のことですが、一つだけ東京の空襲で燃える窓の赤い色が頭に焼きついているのです。記憶なのかどうかわかりませんが。

疎開中の新潟の記憶はありませんが、その後小学生になって夏休みの度に祖父母のところでも過ごしたので、新潟の山村の空気を十分に吸っております。

上野から上越線に乗る。越後川口で黒い煙の飯山線に乗りかえて越後外丸で降りる。バスもタクシーもなかった時代、そこから何里かの道を歩いて祖父母の家にたどりつい

た。一年のうちで最も楽しみな時間でもありました。お祭り、お盆のお膳、野外でみた旗本退屈男の映画、中津川での水遊び、見玉の不動尊、祖母のおこわ、実ったトウモロコシ、蔵の中で見つけた本の、大谷刑部の物語を食い入って読んだ一日、等々、私は日本が好きでした。日本の歴史、特に武士の話が好きでした。

新潟は原爆投下の候補地でもありました。広島投下の次は福岡だったようですが、たまたまその時の天候状態が悪く、長崎に変更されたのだといえます。そして、それでももし日本が戦争続行であれば次の候補地は新潟であったというのです。昭和20年6月8日に戦争続行を決定し、その二ヶ月後に原爆を投下され、そしてようやく終戦を宣言。という国の判断は許されるものではありません。長崎の無念さ、福岡や新潟の微妙な位置づけを考えると、何とこわいことでしょうか。原爆という、世界に類のない体験をこんな状況で背負ったのですから。

終戦をむかえ、世界の制裁を受けて平和国家への道を歩きはじめました。そして70年、日本人の心に平和は質の高いレベルで定着していると私は思います。平和には心の成熟度が必要ですが、そこにはこの70年間、憲法九条を核にして、多くの文化人の並々ならぬ努力があると思います。

“一人の人間をどう立たせるのがよいのか”という命題を全分野で掘り進めてきた、ということです。

与えられた憲法、とよく言われますが、又あの戦争が自衛か、侵略か、とも。他国へ行ってその資源を得るために国をつくろうという傲慢なロマンから出発して、最後に膨大な人材を失って潰れた国が自衛であるはずがありません。むしろその完敗した国が、与えられた憲法―生き残る唯一の道―にしがみついて、柔軟性をもって咀嚼し、自身の肉にしていく、水稻の文化というか、水に揺れながら、良いものを受け入れ、実っていく伝統的な本質が、この与えられたを超えて成熟につながり、日本の新しい地平を創り出してきたのだとしたら、あえてレジームと言わなくてもいいのでしょうか。

もしそれを言うなら、自国の沖縄とじっくり対話をするべきでしょう。

そしてもう一つ。応えて下さい。

アメリカの歴史学者187人の慰安婦についてのメッセージがありましたが、日本の女性としても是非、納得のいく行動をみたいものです。

米国に立てられているという慰安婦の像は彫刻家としても、女性としても恥ずかしいものです。日本があちら、こちらで少しずつの言い訳をしている間は、この恥ずかしい気持ちを世界中の人々の前にさらしていくだけであって世界は納得しなと思います。

韓国側から考えて、当事者であった女性にとって、あの像は心に適っていることなのでしょうか。

又、こういう場合、日韓の美術家が誰も何も言わないというのも気になることです。

私は韓国を批判するのではありません。米国という現代アートを名乗ってきた国土で、政治が大戦中の日本の暗部を清算しきれずに、エゲツないレベルの造形を引き出していることに作家として恥ずかしい思いをしているのです。イスラム国が今、文化遺産を次々に破壊している様子をテレビで見ますが、その心とあの慰安婦の像を町に建てる心とは同じレベルのようにもみえます。

過去の文化遺産や彫像が示していることは、歴史の中で人間が心をどのように獲得してきたのか、ということが刻みこまれているものです。

例えば、エジプトの彫像は四角い形をしています。ギリシャではねじれた人体像が登場します。前者の像を構成する点は同一面上に閉じられており、後者は全ての点が空間に解き放たれているのです。ねじれた人体像をつくるためには前面と側面の間(第三の空間)を切り拓いていかねばなりません。それは器用、不器用の問題ではなく、その時代が獲得している新しい視野(心)なのです。

彫刻は一時代の人間の営みの中からひねり出されてくる、思い、心を空間的ポジションとして凝縮した深い芸術です。

あの像がごく自然に撤去されていくように、そういう方向の心の獲得を国は是非示していただきたいと思います。

そうした問題を未解決のまま、ふり切って、23に及ぶ産業革命に関する遺産申請というアプローチのし方が韓国の不満を呼びこむのでしょうか。“こうした日本人の努力が日本の植民地化を防いだのだ！”と強調しています。いかにも植民地になるのは努力が足りないのだ、と言っているような、此れ見よがしにも聞こえるタイミングです。

戦後70年、慰霊の旅をつづけておられる天皇・皇后の御姿。戦後世代すら消えゆく時の流れになっています。

新潟で毎年迎えてくれた祖母は、昔、山間の発電所で働く韓国人の人夫がいじめられたりすると、かくれて、そっと食事を渡していたといえます。「みじょげで」と。

その祖母も息子を戦地に送り、帰らぬままでした。その悲しみを生涯胸にひめて、多くを語ることはありませんでした。亡くなる前に、娘におこわの炊き方を伝えたというのです。祖母がそんな風に心を残したのを知って涙せずにはいられませんでした。

私も何かを伝えられることを願って制作をしてきました。できるだけ多くの方に観ていただきたいと願っています。



「空間対位法 20世紀・悲・羽音」1995～2013年  
木、紙で組立て彩色 H100×W100×D100cm